

言語意識から見た若者ことば使用の要因

太田 一郎・牧瀬 那生

キーワード：若者語，俗語，流行語，世代方言，言語意識

1. はじめに

この数年，10代後半の若者の行動が世間の注目を集める中，言語面でもいわゆる「若者ことば」と呼ばれる語形等が一部の若者の奇抜な日常行動と絡めて，いわば「見せ物」的にマスコミなどで取り上げられてきた。このようなとらえ方が皮相的であることはもちろん言うまでもないことだが，「若者ことば」のような流行語・俗語の類が言語理論においてどのような位置づけがなされるかについてはあまり議論されていないように思われる。流行語・俗語というラベルが貼られる要素は，新しく作られた形式であったり，古い形式の焼き直しによる新用法への拡張だったりすることが多いが，一時性の含意を帯びて多くの形式が現れては消える中で，いくつかの形式が存続し続けるのはなぜかという問題はあまり取り上げられていない。これは，たとえば「ら抜きことば」の広がる理由が可能動詞体系の整理という言語内的要因に求められるのとは異質の話である。ことばの体系との関連が比較的弱いと思われる俗語・流行語は，永瀬他（1995）のように，話者のパーソナリティ特性との関連から説明が試みられてきた。しかし，ある集団の中で，どのような形式が好まれ，採用されていくのかという問題と，言語形式の側の特性にはどのような関連が見られるのだろうか。本稿では，その一端を若者ことばに対する言語意識の中に見いだすことを試みる。

2. 考察の進め方と調査の概要

本稿では、若者ことばへの言語意識に関するアンケート調査の結果から若者ことば各語形・用法のイメージを描き出し、どのような要因がそれらの使用に影響を与えるかを探る。ひとくくりに若者ことばと言っても、その中には好まれるものと好まれないもの、使われるものと使われないものがある。これは単に好き嫌いという感情だけでは説明できないものであり、何らかの要因が関わっていると思われる。本稿では、まずコレスポネンス分析（CA）により言語項目間および評価項目間に内在する若者ことばの使用要因を拾い出し、次にその要因が若者ことばの使用を示すモデルとして妥当かどうかを重回帰分析により検証するという手順で考察を行う。なお、今回の分析に用いるデータは以下に述べる調査により収集したものである。

2.1 調査項目の概要と回答者の構成

調査は2000年7月と10月に、当時鹿児島県内居住で鹿児島市内の2つの4年制大学と1つの短期大学に通う18歳から24歳までの大学生を対象にアンケート形式で行い、179名（男性92名、女性87名）から有効な回答を得た。アンケートの内容は、（1）パーソナリティに関する設問、（2）行動・友人関係に関する設問、（3）電子メディア（携帯電話、インターネットの使用）に関する設問、（4）若者ことばの使用とイメージに関する設問から構成されているが、本稿では、このうち（4）の結果のみを使用する。なお、回答者の性別、出身地別の構成は以下の通り。

	男性	女性	合計
鹿児島県内出身	63	59	122
鹿児島県外出身	29	28	57
合計	92	87	179

表1 回答者の属性（人数）

2.2 「若者ことば」の選択

言語面の調査項目の拾い出しは、大学生たちがどのような言語表現を若者ことばと認識しているかを探ることから始め、以下の手順で行った。まず、150名の大学生に対し、予備調査として自由回答式で若者ことばと思う語形を記入させ、合計で169語形を得た。次に、これらの語形を1999年度に太田が鹿児島大学で担当した講義及び演習で行った同様の調査から得た語形と比較した。若者ことばの中にはすぐに廃語になるものも多いが、すでに廃語となったものを調査項目に選んでも意味がないので、前年から引き続き使用されていると思われるものを選ぶためである。¹ また、本調査の目的は若者ことばの使用に関わる要因を探ることなので、調査する語形・用法は認知度が高くかつある程度使用者がいることが見込めるものを選ぶ必要があった。そこで限られた使用者だけの特殊なものを避けるために、1999年と2000年版の『現代用語の基礎知識』を参照し、最終的に調査する語形を決定した。

予備調査で集めた語形の中には「テンマチ（天文館）」、「ジョる（ジョイフルに行く）」、「だからよ（あいづち）」、「わっせ（とても）」などの地域語的語形もいくつか見られたが、本調査のアンケート回答者たちには県外出身者も含まれるので、地域色の強い語形は含めないようにした。²

以上の手順を経て、予備調査で得た169語形のうち、99年調査で使用頻度が高かった37語形を取りだした。最終的には、最近ドラマなどでも耳にする「～ない？」という平板上昇調の確認要求の音調を加え、若者ことばとみなすことのできる合計38の特徴を調べることにした。そのうち、表2の20語については、その語形・用法に関する「知識（知っているかどうか）」と「使用（使用するかどうか）」のみをたずねた。この20語をグループIと呼ぶことにする。

¹ その意味では、一過性の流行語は含まれていないことになる。

² 「あっぱる」については、調査時には鹿児島的ではないと判断していたが、その後地域的なものの可能性があると思われることがわかったため、分析には含めていない。

語形・用法	意 味	語形・用法	意 味
あっぱる	あわてる, 焦る	はずい	恥ずかしい
イケメン	かっこいい男の人	バビった	すごく驚いた
おつ	お疲れさま	はまる	夢中になる
おっはー	おはよう	バリサン	携帯電話の電波の受信状態がよいこと
かぶる	言葉や行動が同じであること	ブッチする	さぼる, 約束をすっばかす
きしょい	気色悪い	へこむ	落ち込む
キレる	怒る	むずい	難しい
コピる	コピーする	よさげ	よさそうな雰囲気
タメ	同い歳	ワンギリ	携帯電話を1回鳴らして切ること
ちよつき	直接, 家に帰る	～入ってる	～の状態にある

表2 知識度・使用度を調査した語形（グループⅠ）

語形・用法	意 味	語形・用法	意 味
～的には	～としては	やるゼロ	やる気が全くない
～って感じ?	～のようだ, ～みたいだ	コクる	告白する
～みたいな	～のような	サムい	ギャグがつまらない
～とか	表現を和らげるための無意味なつけたし	オールする	一晩中起きていること
～系	～っぽい, ～のような感じであること	うざい	うざったい
～くない?	上昇調のイントネーション	きもい	気持ち悪い
パクる	盗む	超	とても, 非常に
はぶる	仲間はずれにする	オニ	とても, 非常に
ニケツ	自転車, バイクに2人乗りをすること	めっちゃ, めっちゃ	とても, 非常に

表3 知識度・使用度・言語意識を調査した語形（グループⅡ）

表3の18の語形・用法は、米川（1998）が若者ことばに認める特性（強調性、省略性、隠語性、感覚性、緩衝性）を表すものとして選んでいる。それぞれの形式が備えていると思われる特性は表4のとおりである。それぞれの語形はこれらの特性のうち少なくとも一つ以上を備えており、その意味では若者ことばの代表的形式であると言えるだろう。

	強調性	省略性	隠語性	感覚性	緩衝性
めちゃ	○	×	×	×	×
サムい	×	×	×	○	×
ニケツ	×	×	○	○	×
コクる	×	○	×	×	×
パクる	×	×	○	×	×
チョウ	○	×	×	×	×
オールする	×	○	○	×	×
～系	×	×	×	×	○
～的	×	×	×	×	○
～くない?	×	×	×	×	○
やるゼロ	×	○	×	×	×
～て感じ	×	×	×	×	○
～みたいな	×	×	×	×	○
とか	×	×	×	×	○
オニ	○	×	×	○	×
うざい	×	○	×	×	×
きもい	×	○	×	×	×
ハブる	×	○	○	×	×

表4 若者ことばの特性

(○はその特性があることを, ×は無いことを示す。)

しかし、米川の指摘する若者語の特性は、その言語形式に備わった特性ではあっても、必ずしもその使用／不使用を決定する要因とは考えにくい。これは後述の使用率を見ればすぐにわかる(3.1参照)。すなわち、ある形式にある種の特性が備わっていることがすぐさまその語形の採用と使用の広がりの意味するわけではない。そこには改新形をどう受けとめるかという心的態度や新語・新用法の定着を支える何らかの理由があるはずである。改新形の広がりについては、これまでその動機として社会的威信や社会ネットワークなどが取り上げられてきた。しかしながら、構造的な概念である社会ネットワークは別としても、改新形の使用はおもに社会的威信と結びつけて論じられることが多かった(cf. Milroy 1987)。男性や労働者階層の vernacular (俗口語) 使用の動機としてしばしば言及される潜在的威信も、いわゆる「(不良的)カッコよさ」の類の解説にとどまっており、その記述は非常に平面的な印象を受ける。しかし、改新

形の採用と拡散はそれほど単純なものなのだろうか。この点をより立体的にとらえるために、本稿ではこの18の形式については、知識、使用に加えて、18の評価語をあげてその意識もたずね、これらの語形・用法に対する回答者の評価を検討することにした。意識調査の結果に使用／不使用の選好を決定する要因が多面的に見いだせるのではないかと考えたためである。この語群をグループⅡと呼ぶことにする。

ただし、今回取り上げた18形式の中で「とか」は辻（1999）の言ういわゆる「とか弁」（たとえば、「天文館とか行って、映画とか見ない？」）に関して質問をしたつもりだったが、調査者側の意図がうまく伝わらなかったようで、他の調査項目とくらべる回答パターンが極端に異なっていた。たぶん、標準語用法の「とか」と区別がつかなかったものと思われるので、今回の分析からは除外した。

それでは以下、若者ことばへの言語意識から若者ことばの使用を裏で支える要因について検討を進める。

3. 言語意識から見た若者ことばのイメージ

3.1 若者ことばの知識度と使用度の相関

最初に、語形・用法の知識度と使用度の関係から考察する。表5、6は語群ごとの知識度と使用度の結果である。表5の語形は使用度により4つのグループに下位分類している。また、表6は言語意識の点から5つに分類しているが、これについては次小節で述べる。

まず、全体に見られる傾向を表5を中心に述べておきたい。IAの5つの語形は、「タメ」を除けば既存の意味を拡張して用いているものである。この意味の拡張は、既存の意味を若者の感性に合うものにするため、すなわち、代替の表現ではその感覚はうまく伝えられないために起きたと考えられる。この点、IBの語形である「ワンギリ」も同様のことが言えるだろう。また、「はずい」、「むずい」、「うざい」など「短縮語幹+イ」の短縮型形容詞は、「きしよい」、

語群	語形・用法	知識度(%)	使用度(%)	グループ 平均 知識度(%)	グループ 平均 使用度(%)
I A	かぶる	98.3	89.4	99.2	91.0
	キレる	100	91.6		
	タメ	98.9	85.6		
	はまる	100	98.3		
	へこむ	98.9	89.9		
I B	はずい	95	55.3	94.2	57.9
	むずい	98.9	60.3		
	ワンギリ	88.8	58.1		
I C	おつ	57.5	31.3	82.9	38.9
	おっは一	97.8	47.5		
	きしよい	88.8	35.8		
	よさげ	75.4	42.5		
	入ってる	95	37.4		
I D	イケメン	84.4	8.9	52.5	11.7
	コピる	53.1	10.6		
	ちょつき	31.1	10.1		
	バビッた	41.9	5		
	バリサン	53.1	15.6		
	ブッチする	51.4	20.1		
平均	79.4	47.0			

表5 調査語形・用法の知識度と使用度
(グループ I)

語群	語形・用法	知識度(%)	使用度(%)	グループ 平均 知識度(%)	グループ 平均 使用度(%)
II A	超	100	66.9	98.3	74.8
	コクる	98.9	70.4		
	ニケツ	93.3	69.3		
	サムい	99.4	91.1		
	めちゃ	100	76.4		
II B	オールする	79.9	49.2	94.3	48.7
	～系	98.3	43.3		
	～的には	99.4	58.7		
	～くない?	99.4	43.6		
II C	やるゼロ	50.8	27.4	81.3	24.8
	オニ	74.9	20.7		
	～って感じ	100	29.2		
	～みたいな	99.4	21.8		
II D	パクる	100	83.2	99.7	83
	うざい	99.4	82.7		
II E	きもい	98.3	45.5	66.8	27.5
	はぶる	35.2	9.5		
平均		89.8	52.3		

表6 調査語形・用法の知識度と使用度
(グループ II)

